

大分県立看護科学大学 第6回看護国際フォーラム

「タイと中国の看護基礎教育」(Dr. Tassana BoontongとDr. Huaping Liuの講演から)

松尾 恭子 Kyoko Matsuo, MSN, RN

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 成人・老人看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2004年12月13日投稿, 2005年1月25日受理

キーワード

看護基礎教育、大学教育、タイ、中国

Key words

basic nursing education, baccalaureate program, Thailand, China

1. はじめに

「看護教育を考える」基礎教育と継続教育をテーマに第6回看護国際フォーラムが平成16年10月30日別府ビーコンプラザ国際会議場で開催された。今回のフォーラムは、タイと中国からはDr. Tassana BoontongとDr. Huaping Liuを講師として招聘して開催された。

今回のフォーラムを通して、タイと中国の看護基礎教育の実情を知ることにより、日本の看護教育の課題が、改めて見えてくる機会となった。

2. タイと中国の看護基礎教育

2.1 タイにおける看護教育; 大学教育への移行(タイ国看護評議会会長: タサナ・ブント博士)

今回の講演で、タイの看護教育は「全て学士教育」であることに大きな感銘を受けた。そこで、タイの看護教育が、全て学士教育に移行した経過と、さらに発展を続けている背景を中心に講演内容を紹介する。

タイの看護教育発展の歴史は、3期に分けられる。

i) 第1期: 看護職の養成の黎明期 1896-1926年

1888年に王家のラマ5世が始めて恒久的な病院(シリラー病院)を作り、1896年には、女王が、その中に初めての看護助産学校を作り看護教育が開始された。また、1921年に女王が資金を提供され、タイの赤十字病院とバンコクに看護師養成所が設立された。ブント博士が、国の指導者に先見の明があったと述べられたように、1884年に庶民のための学校が建てられ、1921年には、

義務教育が開始されている(綾部・石井 2001)時期に、看護教育をいち早く国の中に取り入れられたことがわかる。

ii) 第2期: 少数のエリート育成 1926-1953年

マヒドン王子(ハーバード大学卒、医師)は、ロックフェラー財団の協力を得て、看護と医学に海外留学のための奨学金を出している。これは、政府と王家が共同したものであり、1925年から1935年まで行われていた。これにより、女性が海外で看護を学ぶことができた。また、同時に、アメリカから看護師を招聘し、カリキュラム改善に努めた。1937年の第1回国税調査では、10歳以上の成人人口の68.8%が非識字者であった(綾部・石井 2001)時期に、看護教育のための奨学金を出し、少数のエリートの育成に努力していたことがわかる。また、1932年は専制君主制から立憲君主制へと政治的大変革がなされた時期であるが、看護の発展に対する国の期待が大きかったものと考えられる。

iii) 第3期: 学問として体系化された看護の発展 1953年-現在

第2次世界大戦後、看護師のニーズが高まり、看護職を養成する専門学校の数も増えていった。そのような中で、ロックフェラー財団の支援によって、1956年に看護学の学士プログラムが始まった。それと同年に、看護専門学校に進学する場合でも、高校を卒業(12年間の一般教育を終了)していることが条件になった。1978年には、すべての看護職の教育が大学教育に移行し、現在、専門学校のプログラムは、実施されていない。学

士教育の中には、助産師教育のカリキュラムも含まれている。修士課程は、1973年に開始され、CNSやNP(ナースプラクティショナー)を輩出している。博士課程は、1987年から始まったが、当初問題となったことは、教育を担当できる博士号を持っている教員が少なかったことであった。そこで、5つの大学で、プログラムを共同で提携できるように、ブント博士がプログラムの開発を行った。現在は、独自のプログラムを持ち、58人の博士号を授与している。また、博士課程は、1年間タイで学んだ後、海外の大学で学ぶことができるサンドイッチプログラムをつくっている。

タイ国看護評議会会長であるブント博士は、タイ国看護評議会は省庁の一部であり、今後は、看護職者の政治への関与が課題であり、さまざまな保健医療対策の意思決定に関わっていかなければならないと述べられていた。国民の健康に携わる専門家として、現場の声を反映し政策決定に関わっていくことが必要であり、また、教育の発展のためにも重要なことであるとあらためて考えさせられた発言であった。

最後に、ブント博士は「私たちは、共通のものを持っています。共に協力し、学びあいながら、真の意味の共同(collaboration)を行っていきましょう。」と話された。自らも大学のプログラム開

発に携わってこられたブント博士の言葉は、力強く胸に響くものであった。

2.2 中国における看護教育; 現状と将来(中国護理学会副理事長、中国協和医科大学看護学院副院長; フツピング・リユー博士)

講演の内容は i) 過去の看護教育、ii) 看護教育の現在の状態、iii) 看護教育の未来への発展の3期に分けて講演された。ここでは、最近20年間で急速に発展を遂げてきた中国における看護教育について紹介する。

i) 過去の看護教育

看護教育は1888年から始められ、1920年に、ロックフェラー財団の支援によって学士プログラムが設立された。その大学は、現在、リユー博士が副院長をされている中国協和医科大学であった。しかし、1952年に誕生した新しい中国政権は、学士と準学士プログラムを閉鎖した。また、1967年から1977年までは、看護師に教育自体が不必要であるとされ、多くの看護師養成所が閉鎖された。看護師の社会的地位は低く、学生のモチベーションも低い状態であった。看護師の養成所が再び教育機関として再開されたのは、文化大革命終了後であった。中国政府は、緊急かつ重要な課題として看護職及び看護教育を発展させようとし、1983年に学士プログラムが再開された。

ii) 看護教育の現在の状態

看護師になるためには、専門学校、準学士、学士のコースがある(表1)で、専門学校は、中学卒業か高校卒業が入学条件となっている。中学の卒業生は、3年~4年のプログラムがあり、高校卒業の場合は、2年~3年のプログラムがある。最近では、現在の専門学校のプログラムでは、不十分であるとされ、プログラムを向上させるための議論がなされている。そのための1つの計画は、3年のプログラムに1年間の教育を追加することであり、もう1つの提案は、学校に入学する条件を中学卒か

表1 Types and Numbers of Nursing Education Programs at 2001. (Liu 2004改)

Type	Length(years)	Enrollment	Numbers
Diploma (専門学校)	3—4	Junior or Senior high school	388
Higher Diploma (準学士)	3	Senior high school	192
BSN (学士)	4—5	Senior high school	91

表2 Number of Enrollments of Nursing Students from 1996 to 2002. (Liu 2004改)

year	Diploma (専門学校)	Higher Diploma (準学士)	BSN (学士)	Master (修士)	Total
1996	57010	1916	476	7	59409
1997	59587	2270	745	8	62610
1998	64836	3546	957	28	69367
1999	62866	6493	2332	20	71711
2000	65125	15622	4454	77	85278
2001	74978	25052	6490	44	106565
2002	102397	31095	7793	52	141337

ら高校卒に引き上げることである。

準学士と学士は、高校卒業が入学条件である。リユー博士は、異なったレベルで行われている看護教育を大学レベルに移していかなければならないと話されていた。大学の入学者数は急速に増えてきている(表2)。大学のプログラムの内容は、当初、生物医学的なモデルであったが、これは、看護の専門教育ではないということから、新しいカリキュラムが構築された。修士課程(3年間)は、1992年から始まり、2000年以降学生数が増えてきている。2005年には、リユー博士が副学院長をされている中国協和医科大学で博士課程が開始される。大学院教育が進み博士課程に対するニーズも高くなり、中国の看護師の社会的地位は改善されつつあるとはいえ、まだ低い状態であり、看護師に大学院が必要かと言われることもある。このような状況の中で、看護職が看護教育に高等教育が必要であることを立証していかなければならないと話されていた。

iii) 看護教育の未来への発展

過去20年で、中国の看護教育は急速な発展を遂げてきた。しかしながら、まだ、先進国のレベルまで達しておらず、多くの課題があり、需要を満たせず看護師が不足している状態である。急速な発展をとげる科学技術に 대응していくために、より高等な看護教育のプログラム開発が必要である。また、欧米のモデルを取り入れるだけでなく、教材や教科書も中国の文化にあったものが必要である。今後、十分な数の卒業生を輩出し、エビデンスに基づいた看護教育や看護研究を進展させていき、情報システムの導入、分析能力を高めることで国際的交流ができるようになることが中国の看護教育の発展にとって必要である。

まだ、多くの課題は残されているが、リユー博士は最後に「看護教育の明るい未来に向かって協力(collaboratively)しましょう」と、晴れやかな未来を感じさせる言葉と表情で締めくくられた。

3. 日本の看護教育の課題

2人の博士の講演を聞いて、筆者が強く感じたのは、現状の日本の看護教育で、諸外国と一緒に共同(collaborate)できるのだろうかという疑問であった。タイは、看護基礎教育が、全て大学教育で行われている。日本の看護基礎教育は、看護

系大学が、1994年の30校から2003年には106校(日本看護協会 2004)となり、大学の数は3倍には増えてきたが、依然として専門学校のほうが多い。タイの看護教育は、1956年には高校卒業を条件としているが、日本は、中学卒業後から看護教育を受けることが可能であり、複雑多岐にわたるコースで看護教育を行っている現状がある。

日本が、急速に看護基礎教育を大学教育へと移行させている点は、中国と同様である。リユー博士は、今後専門学校の入学条件を高校卒業に引きあげていくと述べられていた。また、中国の大学進学率は、2003年に17%を超え、上海などは、40%以上と日本のレベルに近い(武吉・中野 2004)ことや、最近の中国における経済の発展を考えると、今後、日本の看護教育課程が複雑であることを真摯に受けとめ改善に向かって努力をしなければ、真の共同は望めないのではないかと、筆者は危機感を感じざるを得なかった。

真の国際交流や共同を行うためには、日本の看護教育の変革と高等教育になって何が向上してきたのかをこれからアウトカムとして立証していくことが、私たちにとって重要であると考えられた。

4. おわりに

ブント博士とリユー博士の講演の内容をもとに本稿をまとめさせていただいた。

世界で一番人口が多い国の看護教育の変革に対して、多くの問題を抱えながら取り組むリユー博士の看護教育に対する姿勢に感銘し、全てを学士教育へと移行してもなお看護教育へのたゆまぬ努力が続けられているブント博士の「教育は、ハードワーキングです。一生懸命尽力を尽くさなければならない。」という言葉は、まだ、発展途上にある日本の看護教育を行っていく上での励みとなると考える。遠いところから講演に来ていただき、熱心にお話いただいたことに感謝するとともに、アジアにおける看護教育のエネルギーを感じた。お互いの国が真の共同を行っていくような力を一人一人の看護職がつけていくことが大事であると感じている。

引用文献

綾部恒雄, 石井米雄(2001). もっと知りたいタイ.
弘文堂, 東京.

Liu H (2004). Nursing Education in China: The
present and Future. 第6回看護国際フォーラム抄
録集, 大分.

日本看護協会(2004). 平成16年度版看護白書. 日
本看護協会出版会, 東京.

武吉次朗, 中野謙二(2004). 新版現代中国 30章.
大修館書店, 東京.



著者連絡先

〒870-1201
大分県大分市大字廻栖野2944-9
大分県立看護科学大学 成人・老人看護学研究室
松尾 恭子
matsuo@oita-nhs.ac.jp